



この一冊

Vol. 112



当会会員 星野 泰志 (66期) ●Yasushi Hoshino

本書は、ポルトガルで2014年に出版された『16・17世紀の日本人奴隷貿易とその拡散』の第1章、第2章を翻訳したものを、原著者のルシオ・デ・ソウザ氏と岡美穂子氏が改稿したものである。

日本人が海外に渡航して活動するようになったのは、中浜万次郎などの一部の例外を除いて、明治時代以降である、というイメージを持たれている方が多いのではないだろうか。本書は、こうしたイメージに一石を投じる内容となっている。

本書は、16世紀から17世紀の初めに、多くの日本人がポルトガルの海洋航路などを通じて、マカオ、フィリピン、メキシコ、ポルトガルなどに渡っていたという事情を、世界各国の過去の婚姻記録や住民台帳、異端審問所の証言記録などの史料から明らかにしている。日本人が海外に渡航するに至った経緯としては、①遣欧使節団の一員として海外随行後に現地に残った、②キリシタンとして日本から追放された、③「奴隷」として海外に渡ることを余儀なくされたといった事情が示されている。中でも本書は、③の奴隷として渡航した人たちの事例を多く挙げている。渡航の際には「奴隷」であった人も、全員が終生奴隷の身分にあったわけではなく、主人の遺言があった場合や、「奴隷」であることが違法と裁判所で判断された場

『大航海時代の日本人奴隷 アジア・新大陸・ヨーロッパ』



ルシオ・デ・ソウザ/
岡美穂子 著
中公叢書(中央公論新社)
2,376円(税込)

合などには、「自由民」として以後生活することになった。

「自由民」として海外で活動した日本人の職業は多様であり、「金の錬成技術者」や「ひだ襟職人」といった技術者として生活する者もいれば、傭兵として、スペインのカンボジア遠征などの紛争に参加する者もいた。

本書で示されているのは、16世紀後半から17世紀初め(日本史でいえば、戦国時代の終わりから江戸時代の初期)にかけての、日本人の海外での活動の記録である。本書で取り上げられた日本人は、戦国時代の日本を生き、海外に渡った人々である。戦国時代の足軽や農民が、アジア、ラテンアメリカ、ヨーロッパの

国々に渡り、その地で職業に就いて、現地社会を構成していったということは、非常に劇的な人生であり、文化や言語などの違いからくる苦難に耐えて生活したのであることは想像に難くない。

これらの人々は、幕末以後の日本人とは異なり、海外から日本に戻って、海外で起きたことを自ら語るという機会がついになかった人々でもある。そのため、これまで大きく取り上げられてこなかった。しかし、フィリピンなどアジアでコミュニティを形成した日本人は、たびたび現地で反乱を起こすなど東南アジア情勢に一定の影響を及ぼしており、こうした影響は、16世紀から17世紀の東南アジア情勢を再考する際の大きな補助線となる可能性がある。

本書で取り上げられた注目すべき点としては、記録に残された日本人の多くが、洗礼名で記録されていることも挙げられる。海外に渡った日本人奴隷の多くが、当時の日本のキリスト教と深くかかわっていたことがうかがえる。本書の原書の第3章以降では、日本人奴隷が生み出される過程でイエズス会が果たした役割が詳細に述べられているようであるが、残念ながら、本書は原書の第2章までの内容であるため、キリスト教とのかわりに関する記述は多くない。第3章以降が訳出された暁には手に取ってみたい。 品